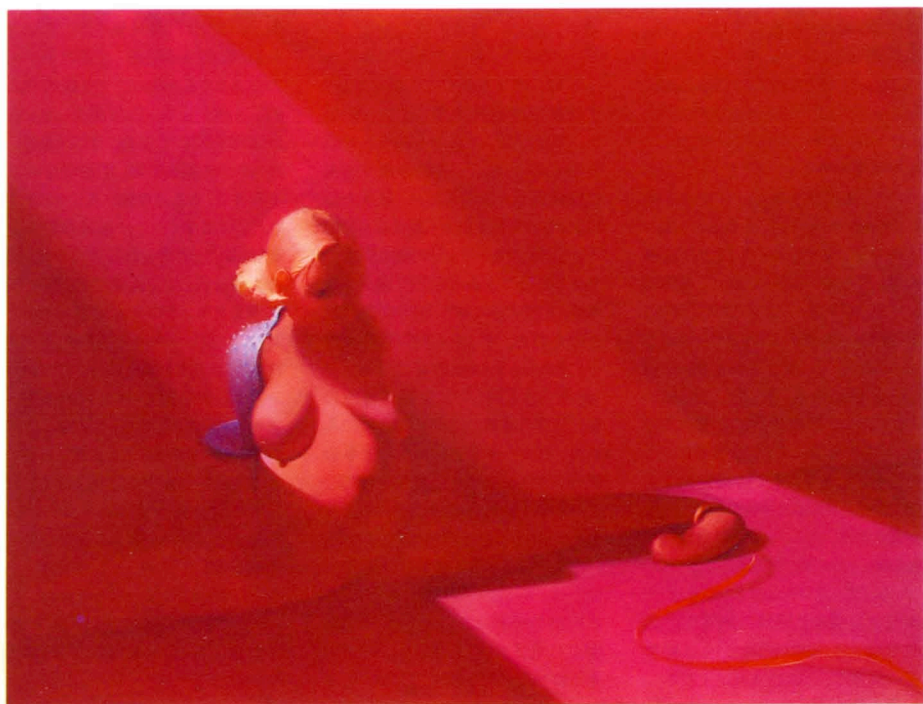


Lisa Yuskavage
リサ・ユスカヴァージュ



ビッグ・リトル・ローラ 1998
キャンヴァスに油彩 193×243.8cm



ナウ・ユウ・キャン・ダンス 1998
キャンヴァスに油彩 162.6×213.4cm

▶グロテスクとサブライムの両極端を行き来するリサ・ユスカウヴェジの絵画。モデルは写真的?と問えば、「私の頭の中。写真や既成のイメージをもとに描くわけではない。でも、95年に彫刻をつくったのね。絵の中の女の子をモデルにして。そのあとその彫刻をモデルに絵を描いた。だから、頭の中のイメージから絵画、彫刻、また絵画とどんどん世代交代していく。私の興味は、いかに再現するかということ。具象というのは figurative ともいうけれど、representational ともいうでしょう。re-presentとは、ふたたび提示するという。ひとつのイメージを掘り下げていく、そんな継続の作業が面白い。もちろん、新しいキャラクターをつくることもできるわよ。でも私の関心はなかに具体的なイメージを描くことではなくて、もっと造形的なもの」。内容よりも形式ということ? 「イタリアやオランダ絵画の伝統にある、形、色、光、ムードといった、目が瞬間的に捉える画面の構成要素。絵画の強度というのはそこにある。まずは視覚的なものであると同時に、内容にもウエイトを置きたかった——感情や心理的なものね。20世紀の画家のなかでは、フィリップ・ガストンがそうだと思う。視覚的な強さと同時に内容も悲劇的で強烈」。ガストンといえば抽象画。「悲劇的」とはどういうことだろう。

「ガストンの本名はゴールドスティンといって、ユダヤ人なのね。でも、自分をクー・クラックス・クランみたいに描いた絵がある。フードを被って顔を隠して、反ユダヤの一味になって自分を嘲る悲しい絵よ。彼の晩年の作品には、デブでアル中の自画像とか、自分の恥をさらしたものが多い」。この発言は、過去にチャック・クロース相手に話した内容と重なってくる。「私の作品は、自分自身のなかにある危険な考えや怖いなと思う部分、女性蔑視や自己嫌悪、成功への憧れ、完璧主義、そんな不快なもの表出なの」。だが、彼女の絵がたんに自画像だとは思えない。私みたいにアメリカ文化を外から眺めるものにとって、ユスカウヴェジの描く少女たちは、物心つかぬうちから「魅きつける性」を要求されるアメリカ女の窮状そのものだ。まったくこの国の女の子ときたら、3、4歳の幼児でもゾクっとするほど美しい。金髪に桜色の肌、父親と始終抱き合い、学校に入れば、初デートだブロムだと相手の確保に忙しい。なんて見解を披露していたら、「私の作品は文化から来るものじゃない」と一蹴されてしまった。「新聞に載るような事件とは関係がないの。もっと人間ひとりひとりにある内部の格闘みたいなもの。ま、自分の社会はよく見えないということもあるのかな。その意味では私、日本

のガレージ・キットに興味がある。あの少女の人形たち。それから日本のポイン漫画っていうのは、みんな目が西洋人みたいに大きいでしょう。この私の絵もその影響なの」と、グリーン色したスライドを引っぱってきた。やれやれ、とんだところで日本にお鉢が回ってきた。「私の絵が性的なものにウエイトを置いているのは、絵画というのは肉体を描くのに反壁だから。肌合いや呼吸、光の反射。人の体はとてもきれいに光を吸収するわ。人体デッサンの授業で、モデルが洋服を脱いだ途端、すごきれいだっただのを覚えている。学校ではポスト何々で、なんでも先へ行こうとするけど、私はずっとこの単純な美を追究していこうと思った」。たしかに、彼女の絵は美しい。人体の曲線も、光に満ちたモノクロームの背景も。と同時に、フリーキーで挑発的な生き物とは、なんとも悪趣味だ。このバランスはいかに? 「ウーン、それが私! オーソドックスとは反対の意味でのヘテロドックスってことかな。ものごとは複雑でひとつに定義できるわけじゃない。私が表現したいのは、無数の感情の吐露。ルネサンスの裸婦もガレージ・キットも、フェルメールも『バントハウス』もみんないい」。カトリック系の学校に通い、週に3回は教会に行っていた彼女ならではの教訓か。 [藤]

Lisa Yuskavage



photo Manami Fujimori

リサ・ユスカウヴェジ 1962年フィラデルフィア生まれ。同市のテンプル大学タイラー美術学校を経て、86年、イエール大学美術学部修士課程終了。翌年、ニューヨークへ。93年、エリサベス・クーリー画廊で発表した、ネオン・カラーの海に浮かぶ超セクシーな女の子の連作で話題を集め、折からのバッド・ガールや身体と性のアートの勢いに乗る。96年のボースキー&ギャラリー画廊の個展では、食欲、性欲、権勢欲にまみれた少女像を絵画、彫刻で表現し、女性からは女の敵と蔑まれ、男性からはレズの権化と恐れられる。巧みな絵画技術で裸婦の復活を目指す、ポスト・フェミニズムの旗手。この秋の新作は、画面、タイトルともロマンティズムが漂い、少女から乙女へと成長か。 [藤]



運命の現われ
1998 麻布に油彩
279.4×139.7cm